
もう一つの現実世界。

零夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの現実世界。

【Nコード】

N3136BA

【作者名】

零夜

【あらすじ】

一人の不良と大勢のやくざが戦っていた。
いや、正直には殴り合い。

この少年は、最近事件を起こしまくっている。不良、それもそのはず。

万引き一日に三回、かつ上げ6 殴り合い七回。とても戦闘力の高い男だ。そんな男が もう一つの現実世界へ。ひよんな事から飛ばされる。

始まり。(前書き)

この物語は、注意」とある魔術の禁書目録を元にして作られた作品です。

始まり。

「よぉ～お前、若い奴らが世話になつたなぁ～あ？」

「ちっ．．ああ？なんだよ。まだなんかようか？このシタツパが。ボス連れて来いよ？」

「てめえら、どうせ。弱いんだろう？」

「いい度胸だな？おい？」

この辺で喧嘩ばかりをしている。

最近噂の不良？と言えるのだろうか。

だがそれに似た。一人の高校生がいた。

「なめてんじゃええぞ？コラ？」

「うるせーな．．さつさと来いよ！！！」

一瞬で、屍にしてやる

オラァ！！！」

その少年の喧嘩が続く間一つ話をしよう。

おやおや、もう時間のようだ。

次回。

始まり。(後書き)

どうでしたか？これを読んだ皆様の感想、アドバイス。

例えば「ここはもう少しこうした方が良いんじゃないの？」

とか「ちよつとここ、字間違ってるよ。本当の字は、〇〇だよ？」

または、「ストーリーの展開速すぎない？」などなど。アドバイスいただければ幸いです。

もう一つの世界。（前書き）

一人の不良と、一人のやくざ。が殴り合いの喧嘩をしていた。
最近この辺では、強いと言われている。少年VSやくざ。

つよいから、勝つに決まっている。

本来なら「やつぱ弱いな。つまんねえ。しけてやがる。じゃあな。
シタツパ」

のはずだが。「はあ？俺が負けた？どう言う事だよ！！」

もう一つの世界。

「おいおいもう動けねえのか？」

と、やくざは、言う。

「てめえ．．舐めんなよ？」

そもそもこうなってしまったのはもう過去のこと、
と言うのは。昨日のことだ。

少年は、公園に呼び出された。

「おいおい。おれをこんなところに呼び出す。ってこたあ。ただごと
じゃねえよな？」

少年は笑みを浮かべながら言う。

「そうだよ。てめえさ。態度気に入らねえんだよ。おい。一遍入院
しやがれ．．それがてめえの魂。

預けてみるか？」

「魂とるのはどっちだろうな？」

なんとやくざのシタツパと思しき人物を二人とものしちまいやがっ
た。

「おまえさあ？言つたよなあ？魂とるってさあ？さあゝて。預ける
のどっちだろう。

そっち二人かそれとも俺か。なあ（笑）」

「ひいひい．．す、すいませんでした」

「おいおい？逃がすと思つてんのか？」

「そ、そんな！！」

「さっさと死にやがれえええ！！！！」

「うつ．．ああ．．」

「おいおいもう。死んじまったのか？駄目だよなあ？魂預けてみる
か？とかいった奴が。

簡単に相手に魂預けちゃ．．ああゝつまんねえ。しずめえとな」
その死体が見つかったらしい。

しかも。見つけたのが仲間のやくざってなあ。最高におもしれえ。勝てるはずなだけだよ。

そのはずの俺の腹に蹴りが入ってる。

「あゝあ強いのは自分だけだと思っちゃったんだ？んじゃあ、もう終わりだな」

「んだと？」

「はあ．．？」

俺の目の前には、銃が一丁向けられていた。

「ち．．」

どうせ足掻いてもむだだ。死を受け入れようとした。

その時、

「その二人、今すぐ喧嘩をやめなさい．．繰り返す。すぐに喧嘩をやめなさい。

銃を捨てなさい」

「ち．．マッポかよ。まあいい。どっちにしろてめえは殺される」目の前に、盾を持った察が。やくざを囲む。

俺は思った。この隙に．．下に飛び降りこいつも落とす

「ちくしょう囲まれたか！！」

「こつちも見ろよ！！」

「何？」

「オラア！！」

蹴りが飛ぶ。そして、あいつが落ちる。俺もだ。

落ちる途中、黒い空間のようなものが見えた

「もしもゝし？」

女の声がする

これが死に際のエンジェルか。

「もしも？」

やけにうるせえな．．この甲高いメスの声、気づけて言ってるんでしょが！！！！

「はっ？ぐは！！」

てめえ死に際の天使が何してんだ？」

「天使？なにそれ？私はただの能力者よ？」

「能力者？ああゝまたこのパターンかよ。」

夏だから暑すぎて狂っちまったんだな．．可愛そうに」

「はあ？本当ですけど？」

「あにめみてえな話があるかよばかばかしい。消える消える」

夏は、こう言う馬鹿が増える。だから夏は嫌いだ。

「おいおいそこの思い込み馬鹿．．さつさと消えな」

「何ですって．．」

その少女からは、なにやら黒いオーラが

「お前大丈夫か？なんか黒いぞ？日焼けか？」

「あああああああ！！！！」

瞬間俺は、氷のようなでも黒くて冷たい。そして痛い。

それが襲う。

「おいてめえ！！いてえぞ！！さつきから訳のわからねえ事ばかり
言いやがってこらあ！！

喰らえ！！」

俺のパンチは、あっけなく防がれた。と言うより。

あたらなかった？バリアが周りに張られた少女を殴ってるような。

俺の反応はこうだ

「はあ．．．？」

「だから言っただろう？能力者だってさ。死にたくなければ私に人
間である記憶を預けなさい」

「はあ？うつわあああ！！」

俺の脳に激しい振動が来る。

そして、目を開ける。

「えっ．．ちよ。ここどこ？」

「ここはもう一つの現実世界。1リアル具現化ワールド。（限りな
く現実に近い世界）

「おい．．おれの頭の中はてなマーク5個くらいあるんだけど．．」

ここは、私達の世界 余計増えたわ．．

そしてここは死んだものの世界 また増えたわ．．

そして、私達は、魔術学生 なんだよそれ．．しらねえーし；
ここにはたくさん能力者が いやだから。

わかんねえよ！！最初から説明しやがれ！！

「鈍いわね？分からないなら、暮らしてみるといいわ。」

どうやらここにいる。魔法使いさんは。顔は可愛いスタイルもバツグン．．

だが説明するのが相当面倒なようだ．．

俺は頭に手を当て、ぽっけに手を突っ込み上を向き。ため息をつく．

「はあ．．で？俺は何をすれバインダー？」

「そうね．．まず始めに」

「待て！！日が暮れる。まとめて話せ。」

「戦ってもらうわ。」

少女は、さわやかな顔で言う。

「戦う？この拳でか？」

「いや．．違うわ。能力よ」

「持ってねえよ！！！」

「大丈夫持つことになる」

「はあ？」

彼女の言っていることが良く分からない。

「ところであんた。名前は？どうする？」

「俺の名前は。1 龍鉦痔 雷鳴「りゅうこうじ らいめい」だが。
どするって、なんだ？」

「あなた。本名で名乗ったら死ぬわよ？」

「いや．．あの本名名乗ったら死ぬって。どう言う冗談だ？」

「あんたってさあ．．いいわ、教えてあげる。」

本名は名乗ったら、ここの世界の人は、あなたを殺しにくる。
人間が嫌いだからね」

「つまり俺達は．．もう」

俺は、そう。残念だけでもう人間ではないわ。と言われるのが一番怖い。

俺は幼い頃から幽霊とか化物とかが大嫌い：

理由は簡単だ。　こわいから。

「そう。残念だけでもうあなたは人間ではないわ」
「うつ．．」

「でも化物でもないわ」

「ああ？」

「私達は　魔法使いよ」

なるほど．．魔法使いと言うなの。化物だな
理解理解。

インプットインプット

うん．．．こえ．．

「で？名前はどうすんだ？」

「空想名を使ってもらうわ。」

「それは、自分で決めるのか？」

「性格には想像して作る。て感じかな？」

「いまいち訳わからない．．」

「さあ、決めて。30秒よ。」

「は、はあ?!」　「そ、そうだな．．なにがいい？
20秒」　「うん．．」

「19」．．

「これってさ．．制限時間あんのか？」

「ないわ」

「ふーん．．そうなんだ。」

「うん」

「ふざけんなあああああ!!!今ままで真剣に考えていた俺の
考えは、どうなった？」

無駄だって事か？返せ！時間を返せ!!!」

あまりの早口で言ってる間に。思いついた

「あ．．そうだ」

「うん？」

「レイフェル．．レイン。」

「おお．．なかなかセンスある名前。センスによって手に入れる能力が違うのよね

その名前だと．．特別な1弦ね（げん）

「弦？」

「弦はその人の活動、能力、全てを使うときにその元となるもの。それが弦。」

「ほお．．で？お前の弦は？」

「私のは．．黒の弦ね。」

「色があるのか？」

「そう。黒は、黒魔術。緑は風。青は水、水色は、氷。銀は、コイン。金は 太陽。

赤は、炎、そして、紫が闇よ。」

「なるほど説明ご苦労」

「私、だからびつくりしたの．．」

いきなりマジな顔になりやがった。

何を言うんだ？

「なにが？」

「あなたのは、色がないの。無色透明なのよ。

無色透明は、結構すごいらしい。

名前の響きが無色透明だからかしら．．無色透明で。クリアないろ。光だけが見える」

「で？お前の名前は？」

「リブイン レンク」

「センスねえな．．」

「言わないで．．私の唯一の弱点なの．．」

「あはは．．なるほど」

そうかいざと言うときは、コレを使えばいいんだな。うん

「で？今からどこへ？」

「自動移動都市 リアフエン。」

「都市ならここにあるじゃねえか．．」

「学園都市よりひろいよ？」

「なるほど．．学校がここで。普段はそこか。」

「そうよ。学校が終わると、電車に乗り換え。そして、バスを乗り。門を潜り。

道を開き進む」

「それって．．とてもめんどくさくないか？」

「そうね．．かなり面倒よ」

声を潜めて言う。まあ．．分かっていたことだけど。

「で？いまからそのルートで。」

「うんっ」

ものすごく明るく言う レイク。

俺はものすごく腹が立っていた。

いまから移動らしい。

もう一つの世界。（後書き）

突然飛ばされたのは、もう一つの実世界。

不良の少年がついたのは。

魔術がある学園都市のとある公園のとあるベンチの上だった。
そして、訳の分からない。センスのない女に出会う

リアフェン（前書き）

いきなり変な世界に飛ばされた俺は、またいきなり。
案内されることとなった。

もういきなりは、勘弁して欲しいものだ・・

リアフェン

俺は、移動都市リアフェンへのきつい道のりをさせられていた。

「はぁ．．はぁ．．お、おい。もうついたのか？」

「お疲れ様。ここが。自動移動都市 リアフェン。」

「お前．．疲れてもいないのか？」

「うん。慣れてるから」

こんな事、なれるものなのだろうか。

さすが化物．．

「さてと行くよ？」

「いや、どこへ？」

「都市ギルド。」

「はぁ？都市ギルド？あのモンスターを狩るゲームにもギルドって出てきたが。」

そんなもん。本当にあんのか？」

「うん。あるよ。ついてきて」

ついて行き。2時間位したところだろうか。そこにはギルドと呼ばれる。場所があった。

「こんなとこ来てなにするんだ？」

「能力者登録。」

「登録？あのパスワードとかの？」

「違うわ。ここの登録は、奴らを倒して。できるもの」

「奴？」

「そう。能力者の体を喰らう。I P a r a s i t e（寄生虫）それと。サイコメトリスト達」

「寄生虫は、分かるが．．サイコメトリスト？」

「人の神経に何らかの異変を起こすことのできる。危険な存在。」

「そんな奴と戦えるのか？」

「やるしかないのよ。」

「なるほど・・・」

そして、登録任務のパーティーが組まれる。

だがその中にものすごい勢いで向かってくる奴がいた。

「んだ？てめえ？」

「質問だ．．あなたは敵か？」

「さあな？敵と思つてんならてきなんじゃねえか？」

「仕方がない。この男は、私達の敵と認識し。」

今この場で。消す。緑の弦．．マインド開始．．」

「はあ？なんだよそれ．．わけわかんねえよ！！」

「わからなくていいあなたは死ぬのだ。」

「はあ？」

やばい今度こそ死ぬ。絶対に死ぬ、。ありがとう親父、母、そしてやくざ。

俺の今までの罪ここで全て。

「やめなよ。リス」

「私はリスではない。リスリン リバージャーだ。」

俺が真剣に死を受け入れようとしたそのときだ。

リスと呼ばれる。クリーム色の神の小柄で束縛服を着ている女はリスとよばれた事に立腹中。

一方、そのリスをとめている。赤髪の男、背が高い。

ここで、大切なことを忘れていた。

真剣死を受け入れようとした。俺の立場は、？今までの過ちを振り返った俺の立場は、？

「はいはい。餌あげるから、ほら、お前の好きな団子」

「こっこれは！！！！ひと夏限定の。スペシャル。三色団子じゃないか！！！！」

「まだいっぱいあるぞ？ほーら」

「うおおおお！！なんと箱買い！！！！全てもらう。お題はいくらだ

？」

「無料だ。」

「わあああい。私は、今、すごく幸せだ!!!」

赤髪の男があっけにとられている俺に話しかけてきた。

「な？可愛い奴だろ？仲良くな？」

「ああ．．で。赤髪、お前名前は？」

「僕かい？僕の名前は、ファレジー ファイガリル ロンダ。ロンドって呼んでくれ。」

「俺は、レイフェル レイン。呼び方は、レインだ」

「で、私が。リブイン レイクよろしく。」

「．．．．」

俺の中でのレイクは、青髪で、背たか？微妙な。だが化物と言う印象だけはあった。

その化物がいま俺に。握手を求めている．．

「いや．．うん」

「なに？恥ずかしがりやさん？じゃあ．．」

いきなり抱きしめられる．．化物に。地獄だ。

だが出るところは、しっかり出ていて。

やわらかさは、どうだったかな．．

おっと、だめだ。俺には、にあわねえ．．

そして俺は、あの子に話しかける。

「ああゝ召し上がり中悪いんだが．．お前、名前は？」

「んむっ？ごくっ！私か？私は、リスリン リバージャだ。

団子が大好き、特に三色、一本どうだ？」

「はあ？」

「友情とさっきの詫びだ。」

「あ、もらっとく」

食べてみて、びっくりした。

そして、声に出してしまう。

「うお．．うまい!!」

「お前も。三色派か？」

「確かにそのとおりだ。俺、ガキの頃から、三色が好きだ。」

「おお同士だな。」

そんななか。

「はい次のパーティー」

俺達の番らしい。

「いくぞ．．リス」

「リスと呼ぶな．．」

「分かった。三色ハンター」

「三色ハンター．．」

俺はすぐにやばいと感じた。

それは、顔をリスが顰めたからだ。

「ああ。その．．」

「レイン．．お前」

と赤髪が言う。

さらに

「あんた．．どんまいね」

「おいレイン．．こっちへこい」

「は、はい。」

「レイン．．ありがとう!!!!!!」

「はっ？」

「えっ？」

「うっ？」

俺と、赤と黒が反応

「少しお礼をさせてくれ。いい名前だ。名前のセンスがいい奴は、嫌いではないぞ．．」

俺の頬に手が伸びる。小柄？よく見ると俺と同じぐらいの背だった。しかも．．綺麗、これを言っちゃなんだが。

俺のもっとも好きと言うタイプ。

その少女が今俺に．．囁かれる「目を瞑れ」

「あ、ああ。こ。こっか？」

「上出来だ」

あの音がした。よくキスシーンで使われるあの音だ。

あの口と口が触れたときのあの音、TVだと音だけで、感触は伝わってこない。

実際に口を合わせてないからである。そんなシーンが今、訪れた口が触れる．．

「あ．．あの」

「ありがとう。」

「あの二人、熱いと思わない？」

「そうね？熱いわね？」

そんなシーンがうれしかったのもぶち壊れるくらいに。

あの二色に。噂されている。

「ヒュ〜」

「ヒュ〜今夜はお二人さんどこへ？」

「いいところ僕知ってるけど．．予約しよっか？」

「えっ．．いつからそんな展開に？コレって。恋愛ものだった？タイトルと違うような．．。」

「二回目のコールだ。さっき呼んだパーティー至急！！」

「やば！！」

「おいおいまずいんじゃないか？」

「間に合わせなければ」

「喋ってるなら急げ！！」

と赤髪。

俺達は急いで走るのだった。

リアフェン（後書き）

ギルドに到着し。ファーストキスをもらうレイン
その瞬間から、二人は団子仲間になってしまわれた。
そして、登録任務、間に合わせるために走る、

寄生虫との戦い。（前書き）

登録任務として。寄生虫を倒すことを命じられた。
パーティーは、任務に向かうが。
そこで。サイコメトリストと会う。

寄生虫との戦い。

「これが任務のステージか．．」

俺は、あまりの偉大さに圧倒されている。

「そう。ここが登録任務１ステージ目。

サイエンス シチュエーション」

「さいえんすしちゅえーしょん？」

「ふんっ．．本当に何も知らないようだな」

赤髪が言う。

「あんた．．それでも能力者なの？」

「しるわけねえーだろ！！元は人間なんだから．．勘弁してくれよ．

．」

「サイエンスシチュエーションとは、」

静かな空気の中、三色ハンターが語り始める。

「サイエンスシチュエーションとは、私達が任務を受けるときに使われる。ステージ。

寄生虫のみが存在している。サイエンスシチュエーションは。 0 0 1、0 0 2、0 0 3と

ステージが無限に広がっている。

「その後につく。1、とか3とかは、一体なんなんだ？」

「後につく数字は。それぞれ、能力者のレベルで決められている」

「つまり．．0 0 3には、レベル3の能力者が居るって事か？」

「そのとおりだ。」

「そうそう。だから私達は、レベル1なのよね。」

（感心するように首を上下する）その言葉を聴けば誰もがテンションがダウンする。

「．．．お前。」

「君ってさ、空気よめないよね」

「え？え？どう言う事？お姉さんにはわからないなあ」

「だから．．レベルが1の俺らのことで．．感心するなっつてんだろぅが．．

悲しくなる」

「あゝあはは」

レイクは、苦笑する。

そんな時、アナウンスが入る。

「これより。サイエンスシチュエーション001を始める。起動言語を忘れるな!!」

「はい」

「分かってるよ」

「了解した」

「了解．．起動言語？」

「力を解放するときに使う言語だ。」

「ああ、なるほど」

「では、スタート!!」

「レッド．．マインド開始」

「黒魔術．．私に力をかしなさい。マインドON」

「風よ。私と一体に．．」

「ほらあんたも起動言語決めなさい」

了解．．

「クリアーネイル．．レストレーション。」

「すごいな．．」「それっぽい」「おお!!聞いたことないよ」

三人は、口々に言う

「くるようだよ?」

「来るがいい．．」

「来なさい!!」

俺の前に一体飛んでくる。

その寄生虫は、長い管のような物を武器にして俺の上に振り下ろしてくる。

「うわぁ!!」

目の前に、両手を翳すとその管が敗れる。

「おれ．．．こんな力持ってたな．．．」

「危ない！！」

「まったく世話が焼けるよ君は、！！炎よ。形を槍にし。あの虫を焼き尽くせ！！」

炎のやり？のようなものが。寄生虫を貫く。

「儀ウイギアアアアグギャサゲリラアアアア」

狂った声を上げ。一体崩れる。

「ちっ．．．武器があれば。クリアレインシュソード。とかかつこいい名前付けるのに．．．て．．．これ。剣？

まあいい。頼もしい武器に使い次第でなる」

前に三体、そして、後ろの５．俺は囲まれたが。

「手に握るものを。槍、釘。またはレーザーとして。この手に現れよ。よし、これで！！はあっ．．．！！」

俺が手をかざす。手を向けた方向に。レーザーが飛ぶ。

白いレーザー

「これでも喰らいやがれ！！！！

一列に並んでる。気持ち悪い奴ら。」

レーザーの発射音が鳴り響く。

「さいっこうだぜ！！！！おもしれえ．．．俺が求めてたのはこう言う喧嘩だあ！！！！オーラ

オラオラオラオラ

オラオラオオラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラ！！！！ゴラア！！！！」

俺は、レーザーを大量発射した。

周りを１２体ほどの寄生虫が絡んだ。が俺は、

両手を上に上げ。

力強く振り下ろす。

すると。上から、レーザーの雨が降りそそぐ。

「はあ．．はあ．．はあ．．」

「おいおい調子に乗って発射しすぎだぞ？弦は。その術者本人の体力と引き換えに起動される。

能力だよ？気をつけてくれよ？」

「ああ．．」

「風よ．．この者に安らぎの風を」

「ああ？これなんだ？」

「回復魔法だ。力、無駄遣いには注意しろ．．」

「真面目に聞いときなさいよ？」

「ああ．．」

寄生虫も全て片付けた。

そして帰ろうとしたときだった．．

寄生虫との戦い。（後書き）

能力者登録任務、それは。大量に寄生虫を片付けることだった。
だが。帰ろうとしたときである。

どうでしたか？感想、アドバイスなどなど。お待ちしております。

買い物。(ショート版)(前書き)

あの任務は終わり。

変な能力を持つ男も倒し。

俺達は、町に出かける用意をしていた。

買い物。(ショート版)

「でかけるって、一体どこいくんだ？」

「黙ってついてくるものだよ？こつ言つのってさ」

「ほおなるほど。そんなもんか？」

「そうだよ。」

「さてここからは、自由行動よ？」

「せっかくだから、私と、ロンダ」

「レインとリスリンでいきなさい」

「はあ？」

「あ．．ああ、分かった。(ああ．．緊張する。この思いにあいつは気づいているのか？)(」

「じゃあ自由行動開始！！」

「さてどこから行くんだ？」

「どこでもいい．．レインの好きなところだ。わわわ。私は緊張している」

「緊張？なんでだ？」

「だ．．だからその．．」

「ああ？」

「気づくまで待つことにする」

「ああそつ。じゃあ最初は、服やでも行ってみっか？」

買い物。(シヨート版)(後書き)

今回は、みぢかくしました。

どうでしたか？

感想や、アドバイス、

話の展開についてなど。

色々、待っています

自由行動 続（前書き）

なんかしらねえけどよ。いきなり買い物だつてよ。

はあ・面倒だなおい。まあ組まされるペアが、黒じゃなくて良かった。

そもそもペアくむ必要があんのか？

まあ・そんなこんなで俺は今、買い物に付き合ってる。

自由行動 続

「服やに来たのはいいいけどよ。何買うんだ？」

「新しい。防具となるものだ。ルインもその服では．．」

「別に俺はいいけど？」

「私が嫌だ．．そんなぼろな服を着ている人と歩きたくはない」

「ああ？わあったよ。」

「つつかよ．．歩きたくねえんならなんで俺と組んでんだ？」

「とか思いながら。俺は服を見る。」

確かに人間世界とは違う何かがあった。

「この服が似合うんじゃないか？」

「わりい．．俺、こつち」「服のセンスがいいみたいだな．．」

そして俺達は服を買い。俺は、シルバーアクセサリーを一つ買った。

首にかけるタイプだな．．最高だぜ．．

「いいのかい？あの二人をほおっておいて」

「はあ．．あんたさあ．．分かる？」

「何がだい？」

「リスは、レインが好きなのよ」

「なるほど．．」

なぐんか満足げに。首を「うん うん」と上下する。赤髪だけど．．
女の子の気持ちくらい。理解しなさいよ．．

私は、そう思った。

「それより。ねえ．．あんた」

「なんだい？」

「あそこの店行ってみない？」

「見るからに静かな場所だね。僕には似合わないよ」

「いいじゃん。行こう？」

「わかったよ．．」

僕はどうも．．戦い以外は苦手なところがある。
なぜかは、分らないけどね．．
とりあえずこの地獄の時間がさっさと終れよ。
僕は、後悔している。

「レイン．．」

「ああ？」

「あそこ行かないか？」

「ああゝ？はっ？遊園地？」

「私は、子供のころから遊園地がすきでな．．」

「でっ？最初のアトラクションの？」

「あのお化け屋敷」

「いいのか？」

「なぜだ？」

「だってよ．．その束縛服だか魔法少女コスだかなんだか訳のわからねえ格好で。お化け屋敷なんざ．．

リス、逆にてめえがお化けに見えるんじゃないやねえ？」

「うっ．．ならば何をきると？」

「これにしろよ。」

と言うと。レイクは、私に似合いそう？なのかわからない服を出したのです。

なんでも、私がほかの物を見ている隙に店員に「あいつに気づかれねえように。レジ頼んだぞ？」

と事ずけて。購入したらしいです。

よくやりますね．．

「ここがお化け屋敷か．．」

俺達は入り口に入った。

そして．．一つ目の階．．

「言っておくが、私は、お化けなど．．」

「じゃあ、なんで入ったんだよ．．しかもしつかり。服の裾にしが

みついてるじゃねえか．．」

「．．．！！これは、その．．」

その瞬間横からお化け役が飛び出てくる。
うっわあああああ！！！！」

「いてえていてえ！！いてえつつつの．．」

「う．．う．．」

「はあ．．なんだこいつ泣いてやがる。

思いっきりお子様じゃねえかよ」

上からコンニャク．．ピタ．．

「う．．きやああああああ！！！！」

「もうすぐ出口だ．．ちったあ静かにしろ．．」

「む．．無理だ！！」

「あつそ．．」

そして．．キャーキャーうるせえ．．リスを慰めながら。

出口にでた。つつかよ．．つまんねえ。最高につまんねえ．

「さて。次はあれだ。」

「うつ．．」

俺はジェットコースターが嫌いだ。

しかも、スピードのある。ハイスピードコースターと言う奴がある。
そいつは、息ができねえ位に、ビュンビュンと．．しかも。乗るの
はカプセルの中で。

スピードをあげる。コーヒーカップで言う。ああ．．．あれだ．
ハンドルみてえのがついてる。

こいつのこのきらきらした目からして。スピードをハイスピード以
上にするのは、見て取れる。

だから俺は、唯一安全で、俺でも知ってるデートスポット。そして、
綺麗な景色を見渡せる

それ．．

「おい。あれの方がいんじゃないか？」

「あれは．．大観覧車？どうするのだ？」

「あれに乗って。上からのパレード鑑賞といこうぜ？」

「ここまでずっと激しい物続きだぜ？」

「少しゆっくりしようぜ。」

「それもありか．．ああ、分かった。乗ろう」

大観覧車に乗っていた。

「こんなに．．上から景色が見渡せるのがヘリ以外にあったのか。」

「お前．．ヘリしかしらねえのか？」

「生まれてから。ヘリしか乗っていない」

「ここだ。このリスは、相当でかい家の娘かなんかだろうな．．

なんでも。普通の俺らが乗ったら。喜ぶ、ヘリを。

リスは、見飽きたと言ってやがる。

もう確定だろ？

「おい．．始まったみてえだぞ？」

「あれがパレードか．．」

風を纏うその少女は、目に涙を浮かべ。

その涙は、風の如くどこかへ消えていった。

「どうしたんだ？」

「すまない．．懐かしくて。あれは、何年前だろう．．

私がまだ。小さな頃、」

時は10年前にさかのぼる．．

「私は、いじめが原因でなっていた。」

「う．．う．．痛いよぉ」

「そんなときだ。親が迎えに来てくれた」

「リスリン？どうしたの？ うん？」

「いじめられた．．」

「まあ！！そんなことが」

「私．．どうすれば」

「ねえリスリン」

「んっ？」

「お母さんと一緒に、遊園地行こう？」

「私は、優しく差し伸べられたその手をつかんで。遊園地に向かった。」

そして、乗ったのがこの大観覧車。そして、落ち込んでいた私がなくしたものを手に入れた」

「なくしたものの？」

「笑顔だ。」「ほお．．」

「それから何ヶ月と時がたつてな．．私の親は、寄生虫に殺された。だから、私には過去があるんだ。」

その過去を忘れられなくて。あのときの母の優しい顔が、思い出から削除したはずなのに。

よみがえってな．．少し涙が出た」

俺は、悲しいと思った。

人の過去に鑑賞するつもりは、ねえ．．

ただ、コレだけはいえんだ。

「俺には、なんの過去もねえけど。」

その過去、ひきずんじゃねえぞ？

過去にとらわれた。てめえなんざ。見たくねえから。」

「分かっている。引きづるつもりはない」

「ただ．．それと同時にいえるのは、」

「？」

リスは、何かを聞くような表情でこちらを向く。

だから俺は、答えるような表情でリスに回答をする

問題じゃねえ．．白紙の答えだけどな

「過去を振り返るのは悪くねえんじゃねえか？」

振り返ると。引きづるじゃあ、意味がちがつて来る」

「ああ．．その言葉。しつかり覚えておく。」

そして．．星が輝く。夜の海に。夜景と言う砂浜から、花火が上がった。

と同時に。リスの体と触れる。

なんかしらねえが。そんな時だけは不思議と、恥ずかしさみてえなのを感じた。

「ありがとう．．レイン。しばらく近くに居させてくれ」
「かまわねえ．．」

大観覧車は、回り続ける。風の少女の過去を回すように。
その頃．．

「ふうゝおわったわねえゝ

あんた格ゲー弱っ！！」

「うるさいね！！屈辱だよ。

ゲームの僕としては、」

「んじゃあ、約束どおり。アイスお願いね？」

「ちっ．．しかしコレだけは言っておくよ」

「なによゝ？」

「次におごるのはお前だ。」

「楽しみにしてるわゝゝ

つてことでよろしくねゝゝ」

「仕方ないね．．約束は約束だよ。

守るさ。腹が痛くなるまで食わせてやる．．」

「いま．．悪意のようなものを感じたゝゝ

「気のせいだよ．．クク．．」

「やっぱ悪意だ」

「ちっ．．まだ私を追いかけると言うのかお主は！！！！」

「だってよゝゝ。まだ殺してねえよ？」

「くそ．．氷の刃よ．．あの罪人を突き刺し。もてあそべ！！」
「言語となえんの？めんどくせな？」

「いこうぜ？闇ども。俺に力を貸しやがれ」

「ち．．このカードで！！コインよ！！太陽の力をかり。その力を剣とし。その力をカードに収め

我に力をかせ!!」

「おっと．．吸収吸収!!」

「くそっ．．」

「一回ごとに呪印唱えてるようじゃ俺にはかてねえーぜ? ああでも
唱えないとつかえねえのかあ」

「かわいそうになあ!!」

「地面が!! 黒に? ぐわっ．．」

「大丈夫か? 氷よ。その力をムチとし。罪人をしばりあげろ!!」

「おっと．．攻撃無効!!」

「なに? あああ!!」

「逆に縛られてやんの? だっせえ」

「後ろをみる!!」

「こっちのせりふだぜ?」

「なにっ? がっ．．」

「この感じ．．分かるかい?」

「もちろんよ．．」

「ああ? この感じ、ちつくしう。休みなしかよ!!」

「敵は、あの町の裏通りのようだな」

「ああ、いくぜえ!! 夜景を邪魔した奴を血噴水に仕上げてやろう
ぜ!!」

自由行動 続（後書き）

自由行動を楽しむ、能力者達。

そんな自由時間を。割くものが現れる。

一方アイスをほおばろうとしていた。瞬間だが。
嫌な気配を感じてしまう黒魔術師と炎使い。
そこに現れる。暗黒の存在。紫のものとは？

闇。
(前書き)

つつかよ．．夜景見てるのに邪魔するのは、どこのどいつだ？
空気読めねえよなあゝ。
だが先にはあいつがいた。

闇。

「くそ．．このままでは。私達は。」

「ちっ．．」

「はあ．．君達も能力者なら。このぐらいの奴は片付けておいて欲しいよ。」

「誰だ！！」

「なるほどね．．変な感じがしたのはあんただったのね？」

「質問する。あなたか？風に不穏な物を持ち込んだのは」「へえ？まだいたんだ？こんなザコ達が！！」「僕達を舐めると。怖いよ？いいか？舐めんなよ？炎よ」

「起動コピー完了．．あそうだ。言い忘れたけどさ？？」

俺のちからつてよお。お前らのじゅもんみてえなものを。「コピーして。

その力。俺の物になるんだぜ？　いくぜ。闇はその力を欲する。」

「なんだつて？まさか君は、」

「何でもいいわよ！！黒魔術たち」

「コピー完了、闇は、その力を欲する。」

「黒いヤリよ！！いきなさい！！」

「黒い。ヤリよ。無数の数で。行け．．」

「えっ？うわあ！！！」

「炎よ。何でもいい。奴を倒すことだけ考える．．」

「ぐっ．．」

「そういえばお前さあ？よみがえれるらしいじゃん？
よみがえる力を吸収」

「がああああ！！！」

「風よ。突風となりて、あの闇を打ち砕け」

「呪印コピー。闇はその力を欲する」

黒き風よ．．あの風を苦しめ。そして。縛り上げる！！」

「んきやああああ！！」

「無駄だ．．あきらめろ」

「つつかよ。夜景を邪魔する嫌な感じが居ると思ってきてみりや。あんときのやくざじゃねえか？あけてびつくり玉手箱だよなあ？

なんでてめえがここにインだ？ご説明願おうか？

血噴水は、その後だ」

「よお？不良。あんときは感謝してるぜ？

なんせ落ちたらよお．．．なんか空から、黒いものが降ってくんだよ。

その黒いもんがさ．．「私達は^{はんのつりよくまじゅつせいふそしき}1反能力魔術政府組織

って言うんだよ？でな？「お前も一員となれ」

とか言われてよ？それからだな？この便利すぎて最高におもしれえ力を手に入れたのはさあ！！

ただな？無色には気をつけろだよ。いるわけねえよな？そんなやつ

「なるほどな．．無色、ダブルブレイカーのことか？ヤクザくんよ

お！！」

「やめろ．．そいつは、レベルトッピクラス。かなう訳がない」

「お主．．やめろ．．これ以上、僕の目の前で死ぬ人を見たくはない．．」

「僕？てめえ．．女か？」

「そうだ。」「なら話は、早ええ てめえらじゃ無理だ下がってる」

「なんだと？」「死にたくなければ言うことを聞けよ。」

「ごちゃごちゃうるせえぞ？」

「おつとこりやわりいな？行くぜええ！！！！ スピードモード！！」

「やめなさい。あんたじゃかなわないわ」

「無駄に死ぬな．．」

「やめてくれないか？」

「おらあ！！！！」

「なに？体のなかから何かを取り出されるような．．この感覚、ぐうわああx！！」

「ほお．．コレがてめえの全てを動かしてる。心臓か？さよならだなあ！！！！言い残すことは？」

「ア．．グ アアワヤ．．ガイガ」

「おせえんだよ！！！！」
グシャ．．

確かに何かをつぶすような感触はあった。

それが奴の心臓だとは、な？

「はあ．．はあ．．はあ。。」（なんだったんだ？あの力、勝手に力が沸いてきやがった。）

「うわああがああ！！！！」

「だめだ！！暴走するぞ．．」

「．．．全て消し去る。我こそは神なり．．．」

「あれは．．神？」

「なんなんだ？」

「小さき者よ。私の邪魔をするな．．」

「おいレインしっかりしろ。炎よ！！ぬわ！！早い？」

「行くわよ黒魔術」

「腕で足りるな．．」

「あいつは。消さないといけ！！カード！！
荒れ狂う者を沈めよ」

「カードは、全て破れ。その力を。術者に戻せ」

「なに？うわああ！！」

「氷よ」

「氷は見る影もなし．．雷により消されよ」
「うわああ！！！！」

（みんなが死んでいく．．私と一緒に。服や夜景をみたれレインは？お化け屋敷に行ったレインは．．私の団子仲間のレインは、？やさしかったレインはどこに．．

やめてよ．．もうやめて。これ以上一人になりたくない．．

やめて．．やめてよ！！レイン！！！！」

「やめろおおおおおお！！！！」

「ぐわっ！！！！なんだこのやさしさは、私の力に反する。思いの強さ．．

その強さ。暖かさ。我は認めよう．．また欲するときまでは」

「あく．．」

「大丈夫か？レイン。」

「ああ．．もんだいねえよ。なんでそんなに心配した顔してんだ？」

「良かった生きててくれたかい．．」

「ああ。良かったな。太陽も喜ぶ」

「いやまて．．お主。いまなんといった？」

「はあ？なに心配してんだって．．．て．．言っただけ．．あ；えーとっ」

俺を見つめる女の視線が恐ろしく．．俺は、

「あんたってさあ．．本当わかんないのね？ここにいる女の子だつて。全員そう思うわよ？」

ねえ？氷の能力さん。」

「まっただくだ．．信じられん。

なあ風よ．．」

「確かにな．．．」

「ああ。レイン 君？ 逃げるかい？」

「逃げ道こつちだ！！早くしろ。女の怒りがレイン お前を追うぞ！！！！」

「賛成！！！！」

「さて．．みんな。追っかけるわよ？男を全員。捕らえろ！！」

男達「うわあああああああああああまじでええええええええ！！！！」

俺達はみげっぱなしで。リアフェンのホテルに戻る事となった。

聞。（後書き）

どうでしたか？

感想やアドバイスなどお待ちしております。

その後。
(前書き)

俺達は走って女の怒りから、逃れたところ。
ぐったりしてしまい。みんな寝た。

けど俺だけは、あの力について。深く考え込まされている。

その後。

「ふう．．．恐ろしいよ．．．女って」

「そうだな．．．俺でも怖い」

「てめえもか？やっぱこええよ

てめえ」 「てめえじゃない．．．俺は、コイントディキース。」

「俺は、レイフェル レイン」

「僕は、ファレシー ファイガレル ロンダ。 ロンダと呼べ」

「俺は、キースでいい」

「俺は レインでも神でもどっちでもいい」

「神とは、呼ばないけどね」

「はあ？んだとお！！！」

「ち．．．あの男どもどこに行ったのかしら」

「分からない。うまく気配を消したようだ」

「あの愚か者．．．」

「そういえばあんた名前は」

「名前？．．．それを忘れてた．．．

質問する。うつかり信用してしまったが。お前は敵か？それとも見方か？闇か？寄生虫か？サイコメトリストか？」 「ちちちち、違う違う！！私は、氷の能力者で．．．それで」

私の首に包丁の刃が触れる。

「わわわわうわあ！！！」

「どうした？さっさと答えろ。さもなけば。この刃物がお前のものをかっきるだろう。」

さあ！！はけ！！！」

「リンこわ．．．落ち着きなさいよ。ほら、これあげるから」

「おおお！！こ、これは！！三色スペシャル。ポリウム？ではないか！！！！」

「こ、これをお前は、どこで？」

「うふふ、あとで教えてあげる」

「ありがたき幸せ。いただく。はむっ．．」

「ふう．．やっとか。これ。もつと来なさい。」

「な、ナニコレ？」

「この子を落착けさせるための道具よ？」

で．．あんた。名前は？」

「私は、スノーホワイト。 ホワイトでいいぞ！」

「くそうくさりげなくクオリティ高い名前だなあ」

「？えっ？えっ？」

と、頭にはてなを浮かばせながら。首を振る。黒髪で。後ろを縛っている。

本当はながいのかなあゝあたしなんか。ショートだよ。

しかも．．胸が私より．．くうう！！！！

「失礼だが．．主、名前は？」 「もぐおいしいいい！！」

「名前は、？」 「うまいうまいうまいぞおお！！」

「．．．（冷たい視線を送ってみる）」 「なんだ？」

「あ、あの名前は、？」

「私か？私は、リスリン リバージャだ。リンと呼べ。」 「で．．

主．．あの男のことすきなのか？」

「え？ま．．まあその．．」 「がんばれよ」

「ありがとう。（ニコッ）」 前に居る。リンは、笑う。

可愛い．．私は女を好きになつたのは初めてだ．．

この子を渡すものかあああああ

たとえ、あの男にも渡すものかああああ！！

「あ、そうだ、確実に捕まえられる方法試してみない？」

「どんな．．方法？」

「今から、男女ペや部屋くじよ。みんなそれぞれに好きな人居るみたいだし。

いいチャンスじゃない」

「わ、わ私は！！その．．」

「誰がすきななの？ん？」

しばらく沈黙．．

「キース君．．」

「ああ、あの男の子ね。リンは？」

「．．私は、その．．だ、誰でもいいだろう！！
それよりお前はどうかんだ？」

「わ、私．．あう．．私はその。ロンダ。

みんながんばりましょう！！」

一方男子の部屋．．

「そういえば、定番ちゅうの定番の話、するか？」

「なんだいそれは、？」

「まさか．．」

「そうだ．．そのまさかだよ。」

「やつやめろ．．」

「お前らさ、好きな奴とかいんのか？」

「うつ／＼き君は！！こんなときにこんな話題を。僕か？僕は、あの黒魔術の女かな．．

「じゃあ、てめえは、？」

「俺か？俺、．．．．．ホワイト．．」

「なるほど。」

「で？言いだしっぺの君は？」

「俺か？俺は、．．．そうだな。あいつかな。」

「誰？」

「名前まで言えとはいってねえだろ？お前らが勝手に名前いったんだ。」

「卑怯だぞ！！」

「仕方ないね．．はかせてあげようか？」

「おもしれえ．．何するんだ？」

「枕投げだああ！！」

「おお、なつかし。いいな久々にやるか？」

俺の枕投げ．．舐めんなよ？」

「俺を忘れてもらっちゃ困る。大会優勝の一位の俺を．．」

「なに一位だと．．」

「一位か？びりに突き落としてやるよ？」

枕投げが始まった。

そして、2時間

「ちっ．．てめえら．．やるな？」

「まだだ。行くぞ．．ダブル枕！！！」

「ア、あれはダブル枕、ならば。デカ枕の雨！！」

「枕よ。剣になれ．．」

「うおお！！」

「ちっ．．」

枕投げ終了、

「はあ．．はあ．．はあ．．」

「ねえねえあんた達、何してたの？」

まあいいわ。さ、このくじ引きなさい。」

「なんだいコレは。」

「コレをひくと。男女ペヤの部屋だわ。」

「な．．ふん。わかってるよね？」「わかってるさ．．席替え同

様。この緊張感」「たまらねえ。最高に

ハイだな．．」

「一斉の！！」

「オラッ！！」

全員一気に引く。

「僕は、つと．．黒と赤の物語が始まる．．

えっ．．黒ってまさか」

「あ．．あたしに決まってるじゃない！！ほら、さっさと行くわよ。」

「まさかそんなうわあああああああ」

赤神の声は、遠くかなた。地獄の門へと向かっていった。

「俺は．．。あー ホワイト。」

「よ、よろしくな．．。」

「そして、俺はつと．．え？

（安らぎの風を、あなたと共に．．。」

まさか．．リスか？」

「なにか不満か？」

「動くのが面倒だな．．この部屋にしねえ？」

「だめ．．。」

「はい．．。」

その後、俺は、風呂に入って。テラスに出てた。

そんなときだな．．

「ただいま」

「ああ。お帰り。」

「レイン。」

「はあ．．なっ．．。」

目に涙を浮かべる風、

俺の胸に飛び込んできて。

そのまま、布団へ倒される

「なあおい。どうしたんだ？」

「私．．怖かった。今までのやさしい。レインが居なくなると思うと。レインのあの姿が

怖くて怖くて。たまらなかったんだ．．まるで．．まるで。私の母のようだった。

ここで泣かせてくれ．．。」

俺は抱きしめ返す。

「悪かったな．．怖がらせちゃって。気をつけなきゃな．．好きなだけ泣け

泣き止んだらこっち向け」

「うわああああああああああああああああ」

「泣き止んだぞ、よしなら俺がわびる」

俺は、頬に手をあて。そいつの唇に触れた。

「まさか．．お前からなんて。ありがとう」

「別に．．」

その後だ。

「あの店の団子は、うまいらしいぞー！」

「そうなのか．．俺も今度くいに行くか

アン団子だと甘すぎて。俺はあんまりな」

「確かにアン団子は。あの甘さがしつこいな。

やはり。三色のあのやさしい甘さがいい」

「さすが三色ハンターばいこと言うな？」

「三色ハンターリンだからなー！」

団子の話で盛り上がる。

「君は、初心者に対する手加減すらないのかいー！」

「うっさいわね？格ゲーに手加減は必要ないのよー！おらー！コンボー！」

「ちっならばこれだー！」

「やるわねー！でもまだよ。まだザンキは、のこっているのー！ー！」

「ザンキにたよるとはー！ー！落ちたなー！」

「言ってる場合かしら？」

K、O！ー！

「ぐわあああ」

「ま．．．負けた。また。」

「相変わらず弱いわね。相手になんない。違うゲームないの？」

「じゃあこの一般的にはホラゲーと言われるものをやるか？」

「ホラーは苦手」「もうスタートしてるよ？」

注意書き．．あなたの背後に注意。

「背後？ええきやああー！ー！」

「キースよ．．．この例の噂を知っているか？」

「ああ、夜中に現れルト言う。落ち武者の話だな
そろそろじゃないか？」

「出てきたら、コミュニケーションをとるぞ」

「分かっている．．．」

全員別々で楽しいことをして思い思いに過ごしていた。

次にくるのは．．．寄生か。組織か？サイコメトリスト．．．
どれにしろ。戦いは続く。

その後。(後書き)

戦いのその後です。

作成した時間が遅くてですね・・・

はぁ・・・もう寝ないと。

前回に引き続き。感想。アドバイス、などなど。お待ちしております
す!!!!

オヤスミナサイ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3136ba/>

もう一つの現実世界。

2012年1月10日04時45分発行